

検証

# 崩拓銀

<1> 10.10.19

激しい爆音とともに、ヘリコプターが人垣の真ん中に舞い降りた。派手な「主役」の登場だった。機内からさっそうと降り立つ姿に人垣からは拍手が起きた。

一九九〇年春、胆振管内虻田町の洞爺湖畔のゴルフ場。早朝から約二百人が招かれ、大規模なコンペが開かれていた。建設不動産業「カブトコム」の主権、ヘリで現れたのは同社の佐藤茂社長。拓銀の海道弘司常務も一緒だった。

コンペは佐藤の「バースデーメモリアル(誕生日記念)」と銘打たれ、参加者の多くは



興奮を今も覚えている。

その年、佐藤は四十四歳。百十八億円、九一年には二千九億円に膨れ上がることに。八九年には株式を店頭公開。当初の二千三百円の株価

や土地を資産の含み益は一兆円以上。佐藤と海道がそろってヘリからさっそうと降り立つ姿は、両者の権勢と蜜月(みつづつ)を誇示していた。

このころ湖畔を見下ろす丘陵の頂では、カブトが仕掛けるリゾート計画が進められていた。総事業費は約一千億円という巨大な施設は、後に「エイベックス(頂点)」と名付けられた。

夕方、近くの温泉ホテルで行われたパーティーも、コンペの賞品として海外旅行や高級ゴルフセットが振る舞われるなど豪華絢爛(げんらん)だった。壇上立った海道は、こぶち上げた。「カブトには拓銀がついていきます」。そして主役の佐藤のあいさつも会場を大いに沸かせた。「これからも北海道のためカブトは大きくなる。来年のコンペで実像を追う。」

だが、華やかな時代は続かなかった。急膨張カブトの業容ははまのた早く、翌九一年末には一が一万円割れ。やがて、ル融資の清算をめぐり拓の泥沼の争いに突入しそく。カブトへの融資はその拓銀の最大の不良債権と上った。

そして、拓銀は、七年後訪れる破たんへの急坂を落ちていった。わずか数ヶ月間に拓銀が味わった頂点間底。洞爺のうたげで見えは、バブルが描いた幻だった。

敬称略、肩書は省略

## 頂点

九月三十日、拓銀本店内の役員会議室。沈痛な表情の同行役員たちに、十一人の弁護士が分厚い書類を手渡した。弁護士は拓銀破たん後、大蔵省の業務改善命令に基づき設置された与信調査委員会のメンバー。調査報告書」と題された書類は半年間に及ぶ調査委員の討議の成果だった。

役員が融資先と積極的に癒着(ずさく)。「杜撰(ずさん)な計画に対し巨額な融資が一人災」だったことを、強烈に物語っていた。

も指導者、組織を衰退させるのも指導者」。拓銀をのみ込んだ巨大な不良債権。だが、それは決して自然発生したものではない。肥大化の過程には、経営者の無責任な暴走や判断ミスがあった。報告書は破たんが「一人災」だったことを、強烈に物語っていた。

# カブトと描いた幻影

カブトの下請け、孫請け業者だった。佐藤の誕生日祝いは、このころ毎年の恒例行事。「やはりカブトはすごい」。出迎えた業者の一人は、その時の

若き経営者が率いるカブトは、まさに「飛ぶ鳥を落とす勢い」だった。

九〇年七月には実に四万九千四百円という最高値を記録した。

その躍進を強力に支えたのが拓銀である。当時、また拓銀の存在は絶対だった。法人所得は道内で断然トップ。株

「五年後に二部上場、八年後二部上場、二十年後に一

(拓銀問題取材班)